

令和7年度

きこえとことばの支援センター

夏季研修会

日時:令和7年8月22日(金)

講師:同志社大学 免許資格課程センター

教授 中瀬 浩一 氏

演題:「きこえない・きこえにくい子どものセルフアドボカシーの力を育むために
考えておくこと」

当日は、岐阜聾学校会場、飛驒特別支援学校サテライト会場、オンラインでの参加による方法で研修会を実施しました。参加していただいた、保護者・関係機関の皆様、ありがとうございました。



参加者の感想

- 具体的な調査資料も用いながら、その数値の裏側に見えてくる聾や難聴の子の心理面まで読み解いてお話して下さったことが印象的でした。
- 合理的配慮と配慮、わがままの違いや「助けて!」と言えるために必要なことなど、今まで出会ったことのない考え方を知ることができました。
- 合理的配慮を求めるためには、メタ認知や周囲の環境、困り事の言語化、困り事の具体的解決方法の想像など、伝えるためには様々なことが必要で、練習していなければ難しく、単純ではないことに気付かされました。
- 「助けてと言えるために」のお話が参考になりました。これからも、子どもが「助けて」と言える環境をつくり、練習の機会をつくるよう意識していきたいと思います。また、子ども自身が考え、選択し、行動するために、親として思いやりや思い込みで手出し口出しし過ぎないように気を付けたいと思います。
- 子ども達にも段階を踏みながら「セルフアドボカシー」や「自分のことを伝えるとは」を伝えていけるようになりたいと思いました。そのために、学校という場を有効に活用していきたいです。

質疑応答

Q1. 家庭でできる「助けて」の練習はどのようにすすめるとよいでしょうか。

A1.

- ・簡単なこと、ちょっとしたことでよいので、「助けて」や「手伝って」と言える場面を「意図的」に作っていくのもよいですね。
- ・子どもの年齢や状態によっても異なりますが、場合によっては「言う」前に「選ぶ」場面を設けることもよいと思います。自分で選ぶ（選択する）ということは意思表示のよい機会になります。
- ・大切なのは、こどもから「発信」してきたときに、大人がどのように「受けとめるか」、どのような「反応をするか」だと思います。せっかく声を上げたのに、大人が「応えてくれなかった」ことの経験を積み重ねるとかえって逆効果になる恐れがありますね。

Q2. 聴覚障がいと知的な遅れや自閉的な傾向を併せ有する重複障がい児のセルフアドボカシーはどのように形成していくとよいでしょうか。

A2.

- ・上記と似ていますが、「言う」経験の前に、「自分で選ぶ」経験をたくさんさせてあげてほしいなあと思います。はじめは「AかBか（あれか、これか）」の二者択一でもいいし、その後、少しずつ「この中でどれにする？（どれがいい?）」も取りあげてみてはどうでしょうか。
- ・留意すべきことも、上記と同じように、こどもから「発信」してきたときに、大人がどのように「受けとめるか」、どのような「反応をするか」だと思います。

Q3. 聾学校の生徒がセルフアドボカシーを学ぶ実践はあるのでしょうか。また、キャリア教育のような各学部の実践例や段階表のようなものはあるのでしょうか。

A3.

・講演の最初に紹介した「聴覚障害児のためのセルフアドボカシー」(ジアース教育新社)や、「聴覚障害 春号(2025年度 Vol.80、通巻 801号/ジアース教育新社)は読まれましたか?実践が多く掲載されていますね。参考になると思います。

・キャリア教育の実践例などは過去の全日聾研の発表などにもあったように思いますし、「キャリアパスポート」は各校で作成していると思いますから、近隣の聾学校に尋ねてみるといいと思います。学校名は出せませんが、いくつかの聾学校でキャリア形成に関する取り組みを発達段階別にステップとしてまとめていますから、ネットワークを活用して尋ねてみるといいですね。

Q4. 個別の教育支援計画 合理的配慮に関するチェックリストのようなものはありますか。

A4.

・合理的配慮は個別に対応して、建設的な対話を行い合意を形成するものですから、「チェックリスト」はないように思います。ただ、文部科学省の「教育支援の手引」などには、各障がい種別にどのような合理的配慮が考えられるかの例が記載されていますから参考になると思います。上記の「セルフアドボカシー」の書籍に掲載されているチェックリストも何かと参考になると思います。

